



Veritas No.32(2006.7.20)

目次 (敬称略)

<” A Passage to Carthage” ——研究と出会い>
浜下 昌宏 (図書館長)

<特集 夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊>
小林 淑子 (英文学科)
石川 康宏 (総合文化学科)
松田 高志 (総合文化学科)
上西 妙子 (総合文化学科)

<研究室から-バクテレフ先生インタビュー>
Boris BEKHTEREV

<史料室から>
佐伯 裕加恵

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (5) >
松村 昌家

無断転載を禁ず

<” A Passage to Carthage” ——研究と出会い>

浜下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

カルタゴ(チュニス)での会議(「人文学の新しい方向」)に出席するためにあわてて旅仕度をして関空まで来ると、前の晩に読んでいた『サランボー』(フロベール)を忘れてきたことに気づく。機中読もうと思ってかばんに入れたのは、数日前に同学の士から郵送で受け取った論文抜刷を2点、シューマッハーの英書(E.F.Schumacher, A Guide for the Perplexed)、あとはチュニジアの旅行案内書である。

チュニスまでヨーロッパ便を使うので乗り換えのフランクフルトでは、待ち時間約8時間もあるので市内に出るつもりでいる。市内地図等はドイツ旅行案内書から破ってかばんに入れてある。会議での報告論文も前日にやっと大筋仕上げたが、手直しも必要である。ところが、である。機中の人となったとたん隣席の老婦人と話を始め、フランクフルトまでの約12時間、読書どころか数時間の睡眠をとっただけであった。

そのH先生とは、どちらまで? ご用事は? という月並みな会話から始まったのだが、出席されるというザルツブルクで開かれるホワイトヘッド学会の話題に始まり、ふだんでさえ稀有の出会いの、実に刺激的な対話をしたのであった。ケネス・イナダとか今道友信とか、さらには阪大のY氏、数日前に亡くなったという(新聞にも訃報が載っていたというが私はその時初めて知った)M氏、等々の共通の師友の名が次々と出てきて、まずは世間の狭さを知ることになった。

ハンブルクに8年留学、ご主人の早世、等々のご苦勞な半生、京大哲学科の先生方の薫陶、好々爺になっていた80過ぎのハイデッガーに会ったこと、ヤスパースは途中で読むのをやめてしまうがハイデッガーはそうではない、といった見識眼、近年の流行本もただけば目を通そうとするがすぐに「こういう本は痴呆になってから読むことにしましょう」と放り出すという。

さて、フランクフルトに着いて予定通り市内に出てみると、ちょうどWカップサッカーのドイツ戦(対アルゼンチン)が始まる市内のカフェの興奮を横目に、ゲーテの生家へと歩く。ここが歴史的な天才の生まれた家か、と4階建ての建物に入る。当時のイタリアやフランスとくらべたときのドイツの後進性が飾ってある絵や調度品からも想像できる。だからこそ強烈な才能を上昇の方向で開花させようとする天才が育つのかもかもしれないと思う。

空港に戻り、夜 10 過ぎの出発の便は深夜の 1 時過ぎにチュニスに着いた。朝まで空港で時間をつぶさなくてはならない。スーツケースを足元において椅子に腰をかける。イスラム風の単純なデザインの壁面が高い天井まで伸びている空間と向きあうと不思議と心が休まり、うとうとしながら時の経過をたしかめる。7 時を機に立ち上がり、構内のカフェで(かつての宗主国) フランス風のカフェ・オレと野菜がふんだんにはいったサンドウィッチで朝食とする。美味を感じるのは、長旅にもかかわらず体調が悪くないしむしろであるし、味の良さはこれからの滞在を楽しみにさせてくれる。

タクシーでホテルに着くと、今度は昨年 9 月のエディンバラでの会議で一緒だったタイのチュラロンコン大の仏教学の女性教授とフロントで再会する。(謹厳そうなこのすぐれた女性学者が無類のアイスクリーム好きであることをのちに知る。) ——こうして私のカルタゴへの旅は、到着までに十分実り多いものとなった。ホテルに荷物を置いて、さっそくバルド博物館へ向かう。ローマ軍によって三日三晩をかけて町を焼かれたときに文書の記録はすべて焼尽したのだが、モノの遺物であるモザイクとタイルなどから往時を偲んでみようと思ったからである。(7 月 4 日記、チュニスにて)

<特集 夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊>

小林 淑子 英文学科特任教授

1. James T. Keatling 著『ネイティブチェックが自分でできる英語正誤用例事典 Writing Modern English』The Japan Times

日本人が書く誤解を招く表現、正しい句読点、似ている語の区別など、一日に一ページずつでもよいから読めば、いつも知らずにやっているミスがわかってくる。

2. Rochelle Kopp 著『辞書では引けない最新ビジネス・キーワード100 対訳』Pacific Dreams, Inc.

ビジネス界でよく使われる英語の本当の意味がわかるようになる。対訳なので、電車の中で一ページずつ読めば、英語だけでなく日本語のビジネス用語も身につく。例えば、欧米では”feedback”は”advice”より好んで使われる。その意味の一つは、「業績評価」。”Empowerment”などビジネスのトレンドもわかるようになる。

石川 康宏 総合文化学科教授

矢部武『中国を取るアメリカ 見捨てられる日本』（光文社，2006年）

この夏には小泉首相の靖国神社参拝が、大きな話題のひとつになるでしょう。それがどういう問題なのかについては、別の書物で読んでほしいと思います。ここでみなさんに紹介したいのは、日本政府による米中関係理解の大きな誤りを指摘したひとつのアメリカ社会レポートです。

日中・日韓関係の悪化のなかで、小泉首相は「日米同盟が強固であれば、アジアとの関係もうまくいく」という趣旨の発言を繰り返してきました。しかし、実際には沖縄や横須賀をはじめ全国の在日米軍基地強化を進めても、日本とアジアの関係は一向に良くなりそうもありません。それだけではありません。アメリカはいま東アジアにおける「建設的パートナーシップ」の担い手として、中国との関係強化を急いでいます。そして、その外交路線の中で「中国との交渉で役に立たない日本」に対する苛立ちを深めています。「日米関係が強固であれば」は、当のアメリカ自身の動きによってすでに裏切られた国際理解となっているのです。

さて、ここに紹介する『中国を取るアメリカ 見捨てられる日本』は、かつて「ロサン

ゼルス・タイムズ」の記者であった著者が、アメリカ社会の奥に深く分け入り「アメリカ人の対中観」を探ってみようとしたものです。取り上げられるのは、大統領はじめ有力政治家たちの発言や政府の方針だけではありません。それよりも、むしろアメリカの普通の市民の「対中観」に焦点があてられます。

第1章は「気がつけば『メイド・イン・チャイナ』」、第2章は「中国語が日本語を凌駕する」、第3章は「冷え込む日中関係、深まる米中関係」、第4章は「中国の“したたかな”世界戦略」、第5章は「“国際感覚”が違う中国企業と日本企業」、第6章は「アメリカ人は日本人より中国人が好き?」、第7章は「私たちは世界の孤児になるのか?」です。

書かれていることから、少しだけエピソードを紹介しましょう。中国の最大の輸出相手はいまやアメリカで（つまりアメリカ人たちの消費生活は、中国製品なしには成り立たないものとなっています）、日本製より30%ほど安い中国の家電製品がならぶ大型電器店がアメリカにはたくさんあるそうです。40代のある白人男性はインタビューにこう答えています。「家の中もテレビからパソコン、DVDなど中国製品でいっぱいです。単に値段が安いからではなく、質がよいから買っているのです。値段がよくて信頼できれば生産国がどこであろうと関係ありません」（24ページ）。

また、メディアでも中国についての情報提供が増え、その一方で1991年～2001年の10年で3大ネットワークが夜の番組で取り上げた日本関連の経済ニュースは、年間121本から14本へと大幅な減少を見せました。同じ期間に、新聞記事では約2300本から800本への減少だったそうです（44ページ）。多くのアメリカ人たちの「東アジアに対する関心」の焦点は、あきらかに日本から中国へと移りつつあるのです。大学では中国語の学習熱が高まっており、日本語学習は日本の文化や歴史に関わるものが多いのに対して、中国語学習は目前のあるいはこれからの米中ビジネスの拡大に深くかかわったものとなっています。アメリカ政府は、もちろん表立って「日本軽視」とはいいません（実際、軍事力増強の拠点としては世界の中でも最重視とっていいでしょう）。しかし、同時に「中国重視」についても少しも隠すことをしていません。

たくさんの取材を終えてこの本をまとめた著者は、日本の外交が世界の流れからますます取り残されていくことに強い懸念と不安を表明しています。そして、日本の政治と社会に次のようなアドバイスを発しています。「具体的には、アメリカ追随外交を止め、アジアの人々の感情や地域全体の友好と利益を考えた外交、さらにはアメリカや中国と対等に渡り合いながら世界の国々とも友好・協力関係を築いていく“大人の外交”を展開していくことだ」（243ページ）。私も、これには賛成です。

決して難しくない、気軽に読める本のつくりとなっています。この夏の読書の一冊に、

ぜひ付けくわえてみてください。

松田 高志 総合文化学科教授

NPO 法人 京田辺シュタイナー学校編著 『小学生と思春期のためのシュタイナー教育 ー 7歳から18歳、12年間一貫教育ー』 GAKKEN(学習研究社)

関西にもやっとシュタイナー学校が誕生しました。ドイツを中心として、今や全世界に約900校以上のシュタイナー学校があるそうですが、我が国では、つい最近になって、ようやく各地に少しずつ出来て来ました。

R. シュタイナーが1919年に初めて設立して以来、その教育思想に共鳴した人たちが、それぞれの地で、その思想を指導原理とした学校を建設し、90年近くを経て今なお増え続けています。

2001年に京田辺に出来たシュタイナー学校は、まだ5年と少しですが、普通の学校では考えられないようなユニークな、魅力的な教育をしています。その最初のまとまった報告とも言えるのが、本書です。

長年私にとって夢のような存在であったものが身近な現実になって、とても不思議な気がしていますが、とにかく教育に関心のある方も、無い方も是非一度読んでほしいという思いを禁じ得ません。私たちの教育観・子ども観を見事に打ち破ってくれて、教育がこんなに豊かで見ずみずしいものなのか、そしてなんと子どもたちは魅力的で知恵にあふれているのかを感じさせてくれるからです。

なお、私事ですが、この9月に、非常勤講師として集中講義に行くことになりました。楽しみです。

上西 妙子 総合文化学科教授

『感情教育』歴史・パリ・恋愛 小倉考誠著 みすず書房 2005年 1300円

小説は、他人に解説してもらうものではなく、自分で読んで「楽しむ」ものです。

ところで推薦したいこの本ですが、「理想の教室」と題されたシリーズの一冊です。上記の3テーマを考えるためのやや長いテキスト抜粋に加えてイラストも数点あり、中断も後戻りも出来るのですから、普通の「授業」よりさらに読む人にとって具合よく作られています。つまり、導きを受けながら、自分のリズムで読んでいけるという、夏休みに相応しい一点です。

19世紀のフロベールによるこの恋愛小説は、実は授業ではあまり受けがよくないのです。それは、私が焦点を置いて語る「年下の男性に向き合う中年女性のはしたなさ・切なさ」を、あなた方が「自分には関係ない」と思うから、または思いたいからでしょう。とんでもない。「あなたがた」が十分描かれています。

加えて、文学作品の歴史書としての実力、さらに都市パリをイメージを喚起しつつ描く包括力。それらが、この値段で味わえます。ぜひ、読んでください。

<研究室から-ベクテレフ先生インタビュー>

インタビューされる人 Boris BEKHTEREV 音楽学科教授

インタビューする人 浜下館長

H: Last night I listened to your Metner' s CD again.

B: Thank you.

H: I like the excellent piece and your performance.

B: Thank you. Beautiful music, beautiful music.

H: Metner himself was a German?

B: He was a Russian.

H: Russian?

B: Of course, his family was from, yes, they came from Germany, but they lived in Russia.

H: The border is neighboring between Germany and Russia.

B: There is no border.

H: Ah, former Soviet Union!

B: Yes, the Russian, they took Baltic Republics. They were, they were, with German soldiers, they occupied them.

H: By the way, you are enjoying your teaching and staying here at KC?

B: Ha, I' m always thinking about my story. I think I' m very lucky.

H: Ten years ago when you came here as a guest professor, then I was so much impressed by your performance of Skryabin. So my concept of your presence is, you are a Skryabin pianist.

B: Thank you. it' s an honor for me, because I would love to, but it' s not so simple, not so easy. Next CD, I would like to record also all Skryabin, but Camerata at Tokyo said why Skryabin? Why Skryabin? This is now out of marketing.

H: Really?

B: Yes, you know, I love this music. I choose it, this is, which are seldom played, not so often, so, if I can, you know, if I can, to this CD, I will, marketing, for me, is not so important. Ha, ha, maybe not so many people will buy that record, but somebody will.

H: But I am sure your excellent performance will attract the audience.

B: Thank you.

H: And music lovers.

B: Now, more difficult, more difficult, because there are so many CDs, you know, very, very difficult, in business, very difficult.

H: What is your first experience of music, or music performance in your childhood?

B: Mmm. The first experience was in my family, because everybody was a musician.

H: Ah, really? All of them were pianists?

B: Yes, my mother was an excellent pianist. My father was a singer and a conductor of a chorus. And my grandmother was a head of a music school. She taught music, solfege, and some musical theories, and piano, also. And grandfather, I remembered him, but he died when I was three years old. He was amateur, but he played piano, cello, guitar, flute and sang. Yes, yes, in my family, music was always, but mostly I remember my mother playing at home, she played wonderful pieces of Beethoven's sonatas, or Rakhmaninov's pieces, Liszt's pieces, pieces of Chopin, everything of Chopin...

H: So, you naturally came to love the music itself. You were surrounded by such an artistic atmosphere. So music is only a part of such an atmosphere ...

B: Yes, a very big important part, yes.

H: Among many instruments, why did you choose piano as your instrument?

B: Because we had two pianos at home, and then because my mother was a pianist, and I tried, when I was five or six, maybe, I tried also violin, but I didn't like it. It was too difficult, I didn't like this, you know, in piano, you put your hand, and already you have a sound, but with violin, the left hand and the right hand do different things, and the sound is not beautiful from the beginning, so I studied one or two months, and then I quitted because I had no sense.

H: For example, in case of Mitsuko Uchida, she is a good pianist of Chopin, or Mozart.

B: Yes, Mozart, I think.

H: But, in your case, if you wish to be called...

B: I don't know, I don't know. I love many styles and I enjoy, to discover this, this, you know, in every performer there are composers and the personality of the performer. There are together. The performer, first, I think, should understand the idea of the composer and know the composer, and then if you want, even if he doesn't want, he expresses his personality because

some pianists say, no. Rikhter, for example, he was wonderful. He said “No, no, no, you should completely devote to the composer, no interpretation, no, you should” . But when he played, he said so, but when he played, of course, his personality came out. It’ s not possible, not to. So I think, I love so much to feel my connection, my communication with the composer.

H: Yes, yes, I see.

B: So maybe if somebody would say that I can play well Chopin, and I can play Skryabin. I would be happy, of course, but I am not sure I could really say, who is the best one for me, whose performer could be the best performer.

H: Do you have any pianists whom you respect much?

B: Of course, Sryatoslav Rikhter and then I like Claudio Arrau very much. But of course there are many wonderful pianists.

H: In what sense do you appreciate Rikhter and Claudio Arrau?

B: Oh...

H: Their techniques, skills ?

B: No, you know, technique is only means for expressing something. For me, it doesn’ t exist. I don’ t think exactly what is technique. Um, why? Why they, and why not other people? Who knows. Very difficult.

H: Did you have good experiences of their performances?

B: Yes, yes, of course. I wonder exactly when, but I was lucky to listen almost all the Rikhter’ s concerts from 1960s.

H: Where?

B: First in Moscow, and then in Italy.

H: That’ s partly why you love Rikhter so much.

B: Yes, of course. But there are many, many wonderful pianists, also, but maybe less, who knows why, who knows why.

H: Formerly there were almost no records, CDs of Rikhter. I heard he hated recording.

B: Yes, but, there are many live recording. When he already was very old, he gave concerts everywhere, and so there are many, many recordings, and without his permission even, they published. He was a little angry.

H: What is your idea between live performance and listening to music by CD or record?

B: So, of course, live performance is, for me, has more value. Because it’ s not artificial. It’ s performance, you know, with all these, because nobody is perfect and when they did a live performance, there can happen some

mistypes, some problems, some mistakes, some... but still in the concert hall, there is always a special atmosphere of communication. You don't need exactly to look at the musician. But listening, you just, you thought, you feel the presence of the person who plays. But listening to the CD, it's almost the same. But you know that CD is prepared. So, there are chosen best. You can't understand where there are scars, sometimes it's wonderfully done.

H: You mean you would rather prefer the existence of noise or the mistake or...

B: In the concert atmosphere, yes, of course. But CD is already CD. So when you listen to the CD, we would like, really, some perfection in everything.

H: But artificial perfection in a sense, and fictitious perfection.

B: It's very important, so, except this artificial perfection, there should be their feelings, their idea, their construction, their sound, there should be. Because of only perfection, it's not yet everything.

H: To improve, in order to improve your quality of performance, do you have any custom or do you make any effort, for example, reading books, or walking, or refresh...

B: Of course, this is, reading and preparing before when you are preparing the composition. I think you should know everything about the composer, so I always try to find, in any languages, the books which are available. For Metner, for example, I read his books, I read Russian books about him. And I took books in our library from English writers. So you should know everything. Almost, almost everything what is possible to know. His letters, his conversation, people's memory. And as for other composers, also the same. And then about the piece, also. When it was written, in which condition, under which circumstances, when it was performed. Who performed. So, everything. You should know everything because it gives you their ideas. It helps and so, of course, this is during the preparation of the piece. And examining the score also very, very carefully, not only all notes but every written things, every slur, every rest, every sign which should give you something, yes. But then, of course, preparing for the concert, very important is to study very well and to play the program before the concert many times. Even if, normally pianists or musicians, before they have very important concerts, the same program, they play in a little city in a little hall, somewhere but many times, because you need to play in public the pieces. This is very, very important.

H: I would like to know the meaning of theory, or musicology, or aesthetics of music in training young musicians.

B: I think it is very important. Extremely important. Because, you know, talented people are everywhere. Some of them are in your hand. Some of them have no idea. They just play. But maybe genius can do, I don't know. But without knowing basic things, and without profound knowledge in your profession, I found hardly very few who could play well. Maybe genius can do, but, I am completely for knowing more as much as possible.

H: What do you want to do in your later life, in future?

B: Sometimes, I am a little pessimistic. So maybe, just a period, because I am already sixty-three. So I started to think how long I will live, such stupid things, but now gradually I quit, stop thinking about this. I would like to teach, and I would like to play, I would like to study new pieces, I would like to study the pieces which I played all my life. Just play for people, and not necessarily at big concert halls, not necessarily with tickets and payment, just to be music.

<史料室から>

佐伯 裕加恵 史料室職員

神戸女学院史料室をご存知ですか？

史料室は図書館本館 1 階の西側(理学館側)の一角にあります。何をするとところかというところ、一言でいえば、学校の歴史についての史料を扱っている図書館のようなところです。

学校にある史料をもとにして、学内外の方々(学生、教職員、一般)からの問い合わせにも応じています。学校の創立年はいつかという年表的なものから、おばあ様が卒業生らしいのだが、いつごろ在学していたのか知りたいというファミリーヒストリーに関連する情報まで、質問内容は様々です。また、卒業論文のテーマに学校史を選んだ学生さんに史料紹介をしたり、学生新聞の取材に協力したりもしていますので、学生の皆さんも気軽にご利用ください。

また、学院史をPRするため、展示も行なっています。ジュリア・ダッドレー記念館 2 階入口を入った突き当たりに展示ケースがあるのをご存知ですか。あそこで常設展示と年 2 回ほどの企画展を行なっています。展示目録も設置していますのでご覧ください。2006 年度前期は 7 月末まで創立者ダッドレー先生の展示を開催しました。後期からは今年創設 100 周年を迎えた音楽学部を記念する特別展を開催する予定です。

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (5) 作中人物への鍵—その1>

松村 昌家 大手前大学大学院教授

神戸女学院大学図書館にベンジャミン・ディズレイリ・コレクションが収められてからまもない頃だったと思うが、Key to the Characters in Coningsby, Comprising about Sixty of the Principal Characters of the Story というタイトルのついた小冊子を見つけて、興味をひかれたことがある。出版されたのは『コニングズビー』と同じく 1844 年。『コニングズビー』は、イギリス最初の本格的な政治小説であるばかりでなく、ディズレイリの代表的な歴史小説としても出色の作品である。

歴史小説といっても、それはウォルター・スコット風の歴史小説ではなくて、ディズレイリ自らが中心となって組織された「青年イングランド派」を中軸にすえて構築された 1840 年代前半の時代的小説を意味する。従って、そこには、政界、社交界、貴族階級に属する多種多様な時代の顔が、続々と登場する。そこで、主要な登場人物に関するモデル探しの興味が喚起されるようになった。

‘Key to the Characters in Coningsby’ に関して興味深いのは、次の例に見るように、作中人物について、それぞれヒントが与えられて、あたかも読者がそのヒントを手掛りにして、空白部分を埋めるようになっていることである。

Coningsby Lord L _____n.
Rigby Rt. Hon. _____.
Lord Monmouth Lord H _____d.
The Duke The Duke of R _____d.
Lord Henry Sydney Lord John M _____s.

最初の部分から、5 例を選んだが、空白に誰の名前をあげるべきか、『コニングズビー』を読んだことのある人、あるいは「青年イングランド派」について、多少の予備知識をお持ちの方は、少なくとも 2, 3 ヶ所は埋められるであろう。



この「作中人物への鍵」には、それぞれの空白に手書きの筆記体で、たとえば、Lord Lincoln (ママ)、Rt. Hon. Croker、Lord Hertford、The Duke of Rutland (ママ)、Lord John Manners (ママ)、という風に当時の噂の大物たちの名前が書き入れられている。

しかしこの段階では、「疑わしい」印のついたものが7箇所あり、「鍵」が見つからずに残された空白が17箇所もある。

ということでいささか物足りないと思っていたところ、本シリーズの執筆をするようになってから、ディズレイリの世界の全容をコンパクトにまとめた重宝な、しゃれた一冊がコレクションの中に含まれていることに気がついた。Dr. H. Pereira Mendes、The Earl of Beaconsfield, K. G. (The Cambridge Society, 1904) で、いわば「ベンジャミン・ディズレイリ小事典」、あるいは「ベンジャミン・ディズレイリ・ハンドブック」といった体裁の本である。



その中に、” Keys to the Characters in the Novels “ の1章が設けられている。単に『コニングズビー』だけでなく、『ヴィヴィアン・グレイ』、『タンクレッド』、『ロウセア』、『エンディミオン』など、全5編に及んでおり、のべ144名のヴィクトリア朝の内外の著名人たちの名が、ディズレイリの作中人物の原型としてあげられているのである。そして、『コニングズビー』と『タンクレット』において重要な役割を果たすシドーニアのオリジナルとされるライオネル・ネイサン・ロスチャイルドや、『ヴィヴィアン・グレイ』にレディ・ダウトフルという奇妙な名前が登場するレディ・プレシントンを含む、32名

の” Celebrated Characters ” に関しては、肖像付きの略歴が紹介されているのが興味深い。ポー・ブランメルはもちろんのこと、バイロン、シェリー、ディケンズ、サッカリ―などもそのなかに含まれている。

ランカシャーの綿業者の家庭に生まれて、1830年代から40年代にかけてトーリー党のリーダーとして政界に大きな足跡を残したロバート・ピールは、「ミスター・フィッツルーム」(Fitzloom は機織り人の息子の意) という名で『ヴィヴィアン・グレイ』に登場する。似たような発想が、同じ作品に登場するウォータルー公爵についても感じられる。この人物への鍵は、もちろんウォータルー(ワートルロー)の戦いの英雄ウェリントン公爵である。

「これらの『鍵』によって明らかにされた作中人物のアイデンティティは、今までにも時にふれて推定されていた。しかし、ロウトン卿(モンタギュー・コリ、ディズレイリと一心同体の間柄であった個人秘書)がビーコンスフィールド伯によって小説に描かれた政治的・社会的著名人たちの名前を出版業者に明らかにしてくれるようになるまでは、世の人々は、描かれている人物についての実感的な知識をもって…ヴィクトリア朝のイングランドの歴史を読むことができなかったのである」と、ロバート・アーノットは、本書序文の中で述べている。(つづく)